うえだ人

最高裁判事に就任した山浦善樹さん（63期）

神田の事務所で庶民のもめ事を解決してきた「マチベン」（街の弁護士）が一転して最高裁判所の判事に就任した。弁護士会の要職の経験もなく、著名な事件を担当したこともないマチベンの起用は異例の人事。司法研修所教官や法科大学院教授など幅広い分野での活躍が評価されたようだ。「自分の評価を試す気持ちで立候補したんですが、選ばれるとは思ってもいませんでした。事務所の顧客からも『先生が選ばれることは絶対にない』と太鼓判を押されていましたよ」と笑う。

旧丸子町出身。中学校の成績はトップだったが、家が貧しいため、卒業後は信用金庫に勤めるつもりだった。びっくりした担任の先生から育英会奨学金の受給を勧められ、上田高校の門をくぐる。

高校時代は新聞班で活躍。新聞作りが大好きな仲間と一緒に、月１回のタブロイド判と週１回のガリ版刷りを発行。「経費は新聞の販売と広告費で調達。生徒会から金をもらっていなかったのは全国でも上田高校ぐらいでした」と振り返る。２年生の後半には生徒会長に選ばれ、松尾祭の開催、長野高校などとの交流拡大に努力した。

自宅は８畳と３畳の２間。夏休みや春休みには毎日、近くの禅寺「全芳院」に通って夜遅くまで勉強。教育熱心な和尚が寺の一室を勉強部屋として提供してくれた。

大学は一橋大学法学部へ。だが、授業にはほとんど出ず、生活費を稼ぐためのアルバイトに明け暮れる。「アイスクリーム工場で２カ月間、立川の米軍基地の引越し屋で半年間働くなど、とにかく手当たり次第、仕事をしました」

高校で同級生だった妻の成子さん（旧姓三嶋）との交際が始まったのは、そんな時。「神戸女子薬科大学に入学した彼女が北海道旅行に行く途中、東京で一泊して大学の寮に電話してきたんです」。文通を重ねる遠距離恋愛が続き、卒業後、東京の中華そば屋の２階で挙式した。「出席者は７－８人。こぢんまりとした式で、新郎の私が司会を務めました」

三菱銀行（現三菱東京ＵＦＪ銀行）に就職したが、保守的な社風が肌に合わず１年で退職した。にわか勉強で司法試験に挑戦し１年で合格。有頂天になって全芳院の和尚に報告すると「お気の毒に」と言われた。「喜んでもらえると思っていたので、意味がわからず、頭が真っ白になりました」

東京・千代田区にある最高裁判所

阿部三郎元日弁連会長の法律事務所で10年間「イソベン」（雇われ弁護士）として働いた後、池袋に小さな事務所を構えて独立。家庭内暴力に悩む女性や障害者など弱い立場の人々の依頼を解決する中で、禅問答のような和尚の言葉の真意に気づいた。「弁護士は社会の公器。無医村の医者だった妻の父のように、自分のためではなく、不幸な人のために生きなさい、と言いたかったのでしょう」

３月１日から「法の番人」の任務が始まった。だが、マチベンで培った庶民の目線は一向に変わらない。「企業が持っている情報量は一市民が持っている情報より圧倒的に多い。飛車角落ちの将棋では真の実力が判定できないように、法による正義を実現するためには、当事者に実質的な『武器対等』を実現することが必要です」。温和な顔が一瞬、キリリと引き締まった。

７年ぶりに女性同窓会開催へ

７年ぶりの女性同窓会を10月に東京で開催します。多数の皆さんのご参加をお待ちしています。

前回は2005年にパレスホテルで開かれ、35人が参加しました。今回も皆さんのご協力により、楽しい集いとなるよう願っています。

日時：10月27日（土）
場所：東京ミッドタウン内のレストラン「ボタニカ」（予定）
会費：5,000円

ご関心のある方は同封した総会出欠の返信ハガキでお知らせください。後ほど詳細をご案内します。